

第十五回 千束藩

激動の小倉藩を支えた支藩と最後の城



往時を偲ばせる旭城址の石垣（豊前市千束）

幕末から明治維新への激動期、豊前市、築上郡を版図とした一萬石の小倉があった。小倉藩の支藩の「小倉新田藩」のち改名して「千束藩」。長州に攻め込まれて小倉城を自焼し田川郡香春に移るなどした混迷の親藩を支えた苦難の歴史を持つ。今、改めて見直しを求める声が強い。

支藩藩主が親藩をリード

小倉新田藩は、小倉藩初代

幕末から明治維新への激動期、豊前市、築上郡を版図とした一萬石を分与されて一六七一年に成立した。歴代藩主は幕府の大番頭、若年寄など要職に就き、また親藩に後継適任者がいなくなった時、養子を送り出して親藩を継がせた。幕末の慶応元年に小倉藩主忠幹が死去した時、嫡男豊千代丸は3歳の幼少だったため新田藩主貞正が見つけて小倉藩を統率。翌2年の第2次長州戦争、豊千代丸の肥後への退避

長州との和議などを行い、長州戦争でも新田藩兵が小倉藩とともに戦った。

その城址が豊前市千束に残っている。現在、千束八幡神社が建つ「旭城」址。当時の建物は既にながいが現在でも1447坪（約4775㎡）の跡地を取り巻く石垣が当時の面影を偲ばせる。完成時期は明治2年、3年の諸説がある。ではなぜ、そんな時期にこの地に支藩の城が築かれたのか。

旭城は我が国最後の築城？

小倉新田藩主は代々、小倉城下の篠崎に屋敷を持ち「篠崎侯」と呼ばれ、貞正も自らの領地に行くことは少なかった。だが維新の戦乱がほぼ終息し、版籍奉還を期に小倉新田藩を千束藩に改称した明治

2年、貞正は香春町から自領に戻った。それまでの混乱を顧みて自藩の藩庁を築いておきたいとの想いから築城を考えたいのではないかとする史家もいる。

千束という名前もこの時に生まれたもの。一带は古墳が多



豊前市八屋、賢明寺に移築された旭城の城門

その千束藩は明治4年7月、廃藩置県で千束県になり城も2年足らずで廃城になった。領民は城を去る旧藩主貞正を涙で見送ったという。「小さな支藩だったが多くの人材が育った。この藩がなければ今日の豊前はなかった。地元の誇りです」と市文化財保護審議会の尾座本雅光委員長は話している。

シニアスタッフ 村田和夫